1910年上富田町で撮影された南方熊楠林中裸像と呼ばれる写真。熊楠の神社合祀令に反対する意思を表現したものといわれる。（南方熊楠顕彰館所蔵）

田辺湾に浮かぶ天然記念物の神島。熊楠の保護活動により守られた貴重な自然のひとつ。

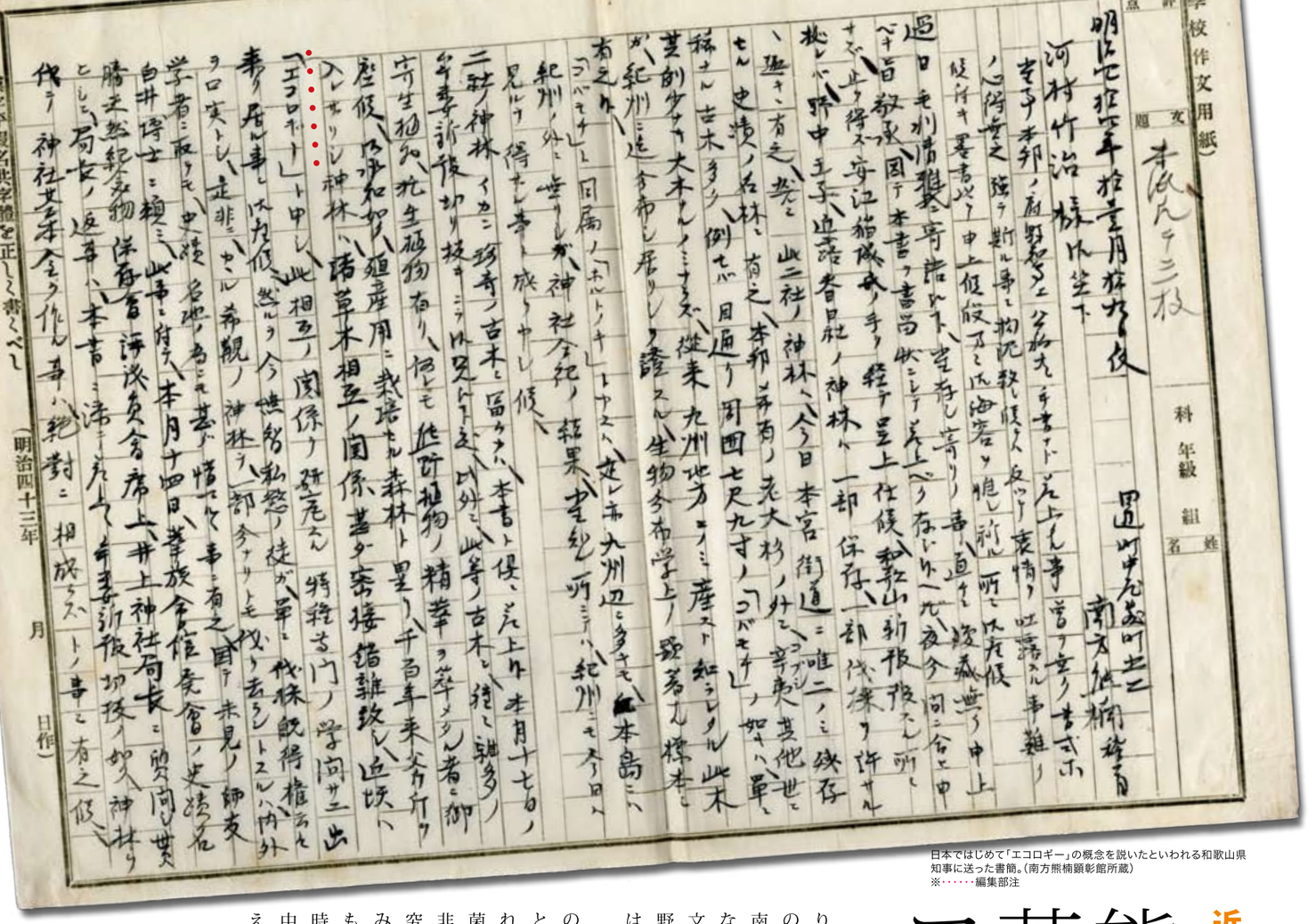
昭和天皇に献上する粘菌標本が入れられていたキャラメルの空き箱（同型）。（南方熊楠顕彰館所蔵）

粘菌の新種ミナカテラ・ロンギフィラの精密な彩色図。この粘菌が発見された柿の木は今も南方邸の庭で実をつけている。（南方熊楠顕彰館所蔵）

十二支考腹稿／南方の複雑かつ膨大な情報が詰め込まれた脳内をかいま見る事ができる「十二支考」の構想書。（南方熊楠記念館所蔵）

熊楠が書き写した和漢三才図会のなかに描かれている天文学に関する記述。これらの知識が「東洋の星座」の基礎となった。（南方熊楠記念館所蔵）

和漢三才図会／10歳から5年かけて筆写した当時の博物学書。知人の家で読み記憶したものを書き写したと言われる。（南方熊楠記念館所蔵）



日本ではじめて「エコロギー」の概念を説いたといわれる和歌山県知事に送った書簡。（南方熊楠顕彰館所蔵）
※……編集部注

近頃はエコロギーと申し候。

熊楠が覗いた葉音の向こうのコスモロジー

知の巨人と呼ばれ、数カ国語を操り、柳田国男をして「日本人の可能性の極限」といわしめた和歌山出身の南方熊楠。彼の好奇心は粘菌や菌類などの植物学だけでなく民俗学や天文学、哲学にまで及んだ。あらゆる分野が熊楠の研究対象であり、それらは系統だったひとつの世界であった。

明治時代後半、神社合祀令で多くの神社や鎮守の森が取り壊されようとしていることに熊楠は激昂する。それらは民俗学や地域の伝承、植物や菌類の研究をしていた熊楠にとって、非常に重要な研究対象であった。研究を一時中断し反対運動にのめり込み、警察に拘留されるような事態にも発展。そして1911年、熊楠は当時の県知事に一通の書簡を送り、その中で「生物と環境は相互に影響を与えあい存在するもの」＝生態学という概念を、日本で初めて「エコロギー」という言葉を用いて説明した。そして彼の情熱が世論を動かし、1920年貴族院で神社合祀令が廃止された。

最近では自然や環境の保護がエコロジーとして語られることが多いが、本来は「生態学」を指す。彼は、この世界全体も〝生態学〟のひとつとしてとらえ、密教における曼荼羅のように相互に関係・影響し合い成立していると考えていた。

熊楠を魅了した粘菌とは、微生物を摂取するような動物的性質と、胞子によって繁殖する植物的な性質を併せ持つ生物である。落ち葉をそっと払い倒木の下を覗くと粘菌に出会う。顕微鏡を通してミクロの世界を覗くと熊楠のコスモロジーが実感できる。それは生物の生きる姿であり、小さな宇宙でもあった。

100年目のエコロジー

日本人の可能性の極限、南方熊楠

南方熊楠は1867年和歌山市に生まれる。海南市にある藤白神社から、「熊」と「楠」の文字をあやかり熊楠と命名。幼少の頃から記憶力に優れたが、学校での勉強は好きでなかった。大学予備門（現在の東京大学）中退後渡米。フロリダやキューバで植物採集に、英国では大英博物館で資料整理に明け暮れる。1893年26歳で科学雑誌「ネイチャー」に最初の論文「東洋の星座」が掲載。1900年に帰国し1904年に田辺に移住。神社合祀反対意見を発表し、その際に日本で初めて「エコロジー」を唱えた。今からちょうど100年前のことだった。

衣服には無頓着だったと言われる熊楠だが、なかなかの美男子である。（南方熊楠顕彰館所蔵）　歳をとってから掛けだした老眼鏡。（南方熊楠記念館所蔵）

植物採集の際に腰にぶら下げていたひょうたんの水筒。（南方熊楠記念館所蔵）

南方熊楠シンポジウム開催

■日時：平成23年10月2日（日）
13:30〜17:00
■場所：明治大学アカデミーホール
（東京都千代田区神田駿河台1-1）

熊楠がエコロジーを唱えて100年目の今年は「国連生物多様性の10年」の始まりの年でもある。基調講演に博物学者で、作家としても多分野にわたり執筆活動を続けられている荒俣宏氏をお招きし、現代社会に熊楠のエコロジー思想を問いかけるとともに、熊楠が愛した和歌山県の素晴らしい自然を全国に発信。入場無料で先着1000名、要申込。
（お申し込み方法は下記問い合わせ先まで）

主催：和歌山県・明治大学
共催：環境省

※同時開催（10:00〜18:00）
「熊楠と熊野」紹介展示（遺品・標本・映画など）
明治大学アカデミーコモン２階（同住所）にて

お問い合わせは／和歌山県自然環境室
TEL.073-441-2779